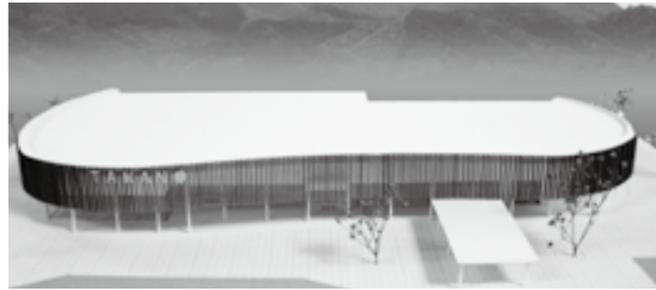
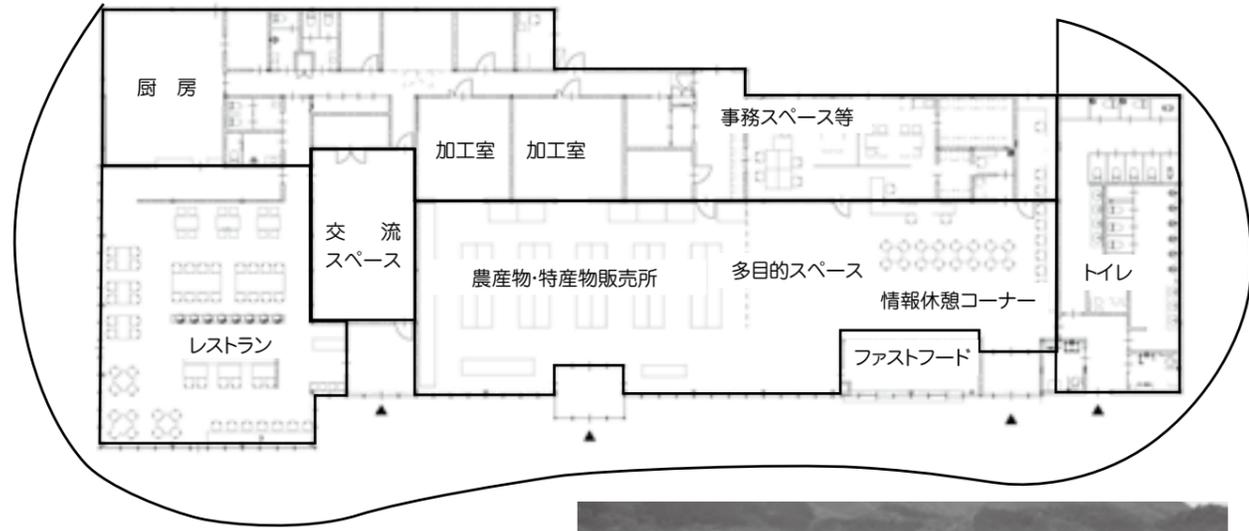
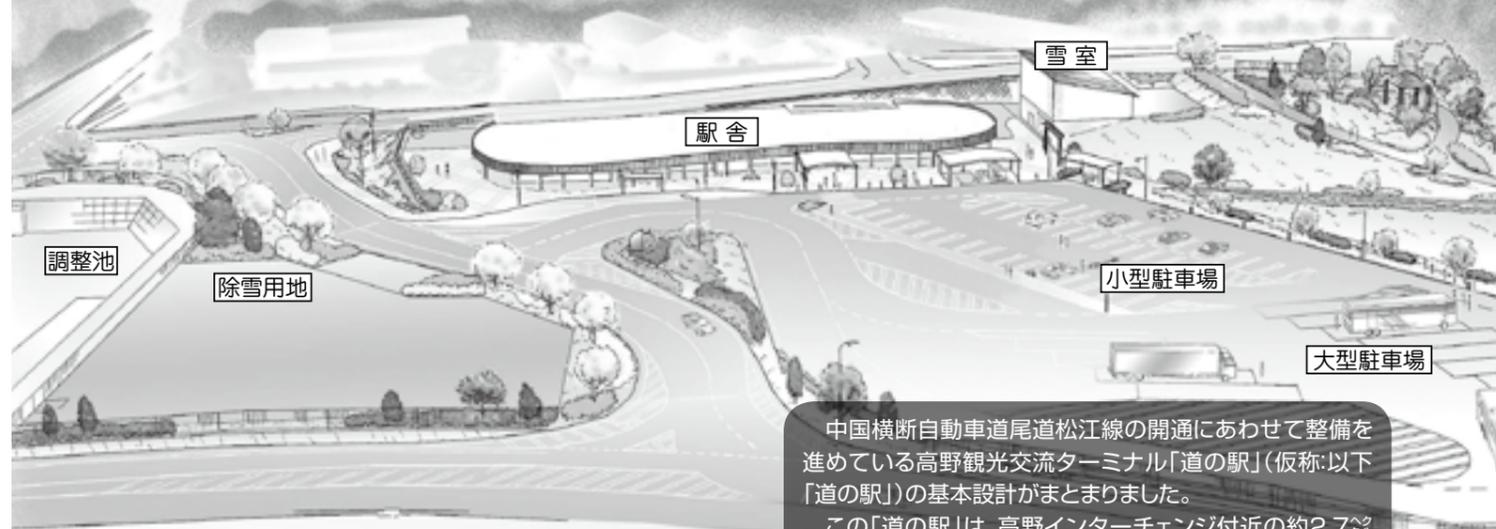


「道の駅」館内計画平面図



「道の駅」駅舎鳥瞰図

# 高野に「道の駅」を整備 平成25年春オープンを目指す



※イメージであり、一部変更する場合があります。

中国横断自動車道尾道松江線の開通にあわせて整備を進めている高野観光交流ターミナル「道の駅」(仮称:以下「道の駅」)の基本設計がまとまりました。この「道の駅」は、高野インターチェンジ付近の約2.7㏊の敷地に駅舎や駐車場(普通車40台、大型車13台)、緑地広場などを整備し、来年春のオープンを目指しています。

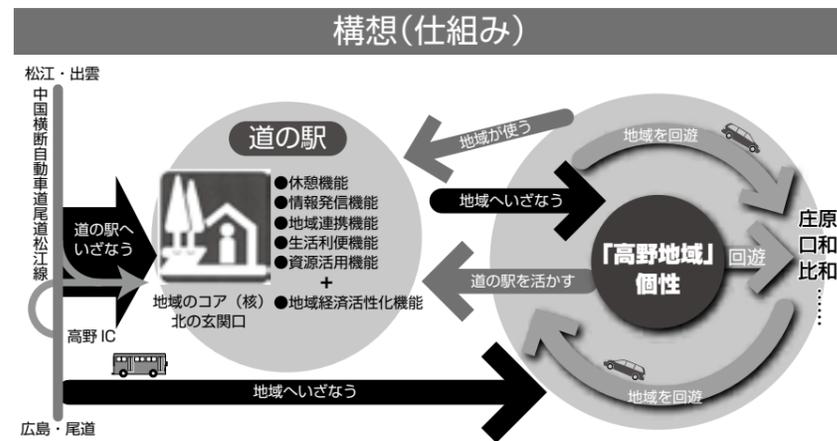
■個性を生かした外観■  
駅舎は木造平屋建てで、床面積は約1,100平方メートル。外観は、高野特産のりんごを連想させる形状としました。屋根は雪を落とさないフラットな構造とし、人の通るエリアの安全を確保すると同時に、除雪の手間を最小限に

## りんごをイメージした駅舎

「道の駅」の基本機能を踏まえ、高野地域の立地条件や自然環境、地域資源を生かしながら、人・モノ・情報を結ぶ新たな拠点・ネットワークを構築し、まちの元気を生み出す「地域のコア(核)」の実現を目指します。

■地域のコア(核)の実現■  
収穫祭や地域を巡るガイドツアーの開催など、コミュニケーションツールを推進し、地域の「誇り」や地元学(歴史、文化、達人など)をPRし、来訪者が地域の良さを体感することで交流を促進します。

活力ある地域づくりを行うための「地域連携機能」を併せ持つことが採択基準となっています。  
地域連携機能では、地域住民が漬物講座やジャムづくり体験を開催するなど、来訪者との会話・交流を大切にしながら、ファン・リピーターの拡大を目指します。



■雪資源の活用■  
高野地域にとって、やっかい物であった雪を逆に地域活性化に活用できるよう、雪室を敷地内に整備し、産品や加工品を雪室保存商品として高付加価値化することで販売促進につなげます。

■交流を生む多機能空間■  
駅舎には、トイレ、情報休憩コーナー、多目的スペース、農産物・特産物販売所などを配置します。レストランは北側に設け、高速道路や中国山地の山並みの景観を眺めることができます。

多目的スペースではギャラリーやサークル活動の発表などを開催。情報休憩コーナーはタイムリーな道路・観光・地域情報の発信に努め、観光情報のワンストップサービスを目指します。

レストランは高原カフェスタイルで、豊富な山の幸を中心としたメニューを基本とし、地元特産のりんごや夏いちごを使ったスイーツなども提供します。

■道の駅機能を充実■  
「道の駅」の基本機能■  
「道の駅」は、誰もが安心して利用できるよう一定以上の水準を確保するための登録制度が設けられており、道路利用者や地域住民のための「休憩機能」、道路利用者や地域住民のための「情報発信機能」、「道の駅」をきっかけに来訪者と地域、あるいは地域と地域が連携し

「道の駅」機能は、誰もが安心して利用できるよう一定以上の水準を確保するための登録制度が設けられており、道路利用者や地域住民のための「休憩機能」、道路利用者や地域住民のための「情報発信機能」、「道の駅」をきっかけに来訪者と地域、あるいは地域と地域が連携し

また、庄原市の「北の玄関口」の顔として機能することで、多くの観光客を呼び込み、さらに庄原市全体に人をいざない、市内全体を盛り上げるきっかけとなる施設を目指します。

本路線は本線上にパーキングエリアを設置しないことから、「道の駅」が道路利用者のための休憩機能や情報発信機能などの役割を担います。

尾道松江線が開通  
尾道松江線は国が整備する無料の高速道路で、三次ジャンクション(JCT)から吉田掛合ICまでが平成24年度末までに開通します。

## 庄原市の「北の玄関口」

## 市民が創る「道の駅」

「道の駅」整備に、市民の意見を反映し、市民の主体的な運営体制を図るため、平成20年度から高野地域づくり未来塾や道の駅準備委員会、「道の駅」の整備方針や導入機能などについて協議を進めてきました。

昨年度からは、「道の駅」と連携する各種団体などから委員を選出し、道の駅管理運営協議会を設置。年間20回の会議を重ね、建築設計や各施設の運営方針、直売所に関するなどを検討してきました。時には夜7時から始めた会議が夜中の12時を超えることもありましたが、「自分たち(市民)の道の駅を、自分たちで創ろう」と、常に意欲的な委員の皆さんによって、熱心に協議が進められています。



管理運営協議会の様子

## VOICE

道の駅管理運営協議会委員に聞く「どんな道の駅にしたい?」

### 「まちを元気にする道の駅」



道の駅管理運営協議会会長  
まつしまよしはる  
松島義治さん

私たち市民の声を「道の駅」の整備や運営に反映し、市民の皆さんに愛される「道の駅」となるよう熱心な議論を続けています。新たな地域振興の場として、「道の駅」の運営やまちづくりに多くの市民がかかわり、「まちの元気づくりの場」にしていきたいと思っています。

### 「心地よさでイメージ向上を」



高野地域づくり未来塾副塾長  
まえだまりこ  
前田万里子さん

「道の駅」の第一印象を決めるのは「トイレ」かもしれません。清潔感を保つことはもちろん、パウダールームを設置するなど、話題となる「トイレ」を目指しています。また、眺望のよいレストランでゆっくりと食事が楽しめるなど、居心地の良さをイメージ向上を図りたいと思います。

### 「農業が元気なまちを発信」



高野町あつぎ会会長  
まぶねじゅんいち  
馬船純一さん

徹底して市内産品の充実にこだわり、地産地消はもちろん、「道の駅」を流通の拠点として、「農業が元気な庄原市」を全国にPRしていきたい。そして、食育や体験農業など、消費者との交流を進め、「農業と観光でメシが食えるまち」を実現したいと思っています。

### 「観光プラットフォームに」



庄原市観光協会事務局長  
きつかわりえ  
吉川理恵さん

会議に出席し、いつも高野の人の地域に対する熱い思いとパワーには感心しています。情報発信機能と着地型(体験型)観光の窓口機能を充実させて、「道の駅」が市内外の人や資源、情報をつなぐ観光プラットフォームになるよう、庄原市観光協会としてかわっていききたいと思っています。

## 未来創造支援事業でソフトを充実

尾道松江線の開通や「道の駅」の整備効果を最大限高めるため、県の過疎対策事業「未来創造支援交付金」を活用し、昨年度から①「道の駅」整備事業②高野の逸品100プロジェクト事業③着地型観光推進事業④雪資源活用事業の4つの事業を一体的に進めています。

### 「道の駅」整備事業

この事業では、コンサルタントを活用し、道の駅管理運営協議会のアドバイザーとして市民意見の取りまとめや、

専門家の持つ経験・ノウハウを施設整備や運営手法に取り入れています。

協議会に参加している藤原裕子さんは「これまでの事例はもちろん、経験に裏打ちされたアドバイスはなるほど」と感心するものばかり。専門家や民間企業のノウハウはとて大切だと感じた」と話しています。

### 高野の逸品100プロジェクト事業

「道の駅」の開業を見据え、地域経済の活性化を図るため、高野地域の農産物を活用した特産品開発に取り組んでいます。

この事業では、特産品開発の専門家や料理研究家を招き、特産品開発講

座や生産者へのコンサルティングを行いながら、新商品開発および商品改良、テストマーケティングを進め、「売れる特産品」づくりに励んでいます。

また、認証制度を設け「高野らしさ」や「安全安心」など、一定の基準を満たしたものを「高野の逸品」として認証し、「道の駅」の開業までに100品目を目標に活動を進めています。

そして、この取り組みをモデルとして市内全域に広がっていきます。

### 着地型観光推進事業

「道の駅」に観光プラットフォーム機能を整備し、観光情報や資源と東

観光のワンストップサービスを実現させることにより、来訪者を市内へいざない回遊させる仕組みづくりに取り組んでいます。

今後、庄原市観光協会などと連携して、体験メニューの開発や人材育成を行うとともに、農村民泊を推進し、教育旅行の受け皿整備を進めていきます。

### 雪資源活用事業

高野地域にある雪室実証実験施設を活用し、市内の産品や加工品の保存実験を行いながら、雪資源活用の検討、および雪室による特産品の高付加価値化、新たな特産品開発を進めています。

## 「道の駅」は地域の「顔」

市民の力を結集し、誇りとなる「道の駅」を

道の駅管理運営協議会  
アドバイザー



いかり  
孝洋さん

市内産品の充実がカギ  
訪れる人々は、「道の駅」や直売所を見て、その地域の人々の生きざまを感じます。

そのため、高野地域をはじめとした市内産品の品揃えの充実が欠かせません。現在直売所ブームにのって、直売所という名の巨大スーパーが増えてきています。しかし、その直売所は、全国各地から仕入れを行うため、「地元農家は儲

かつていない」というケースがあります。何のためにこの施設を建てるのか。この意味をよく理解して、地元農家をはじめ市民が主人公となる「道の駅」にしていくことが大切だと思います。

### 市民参加が欠かせない

直売所では、生産者自身が「自分たちの直売所」という意識で、直売所の運営や販売、消費者との交流にも積極的に参加することが重要です。また、情報コーナーや多目的スペースでは、市民自らが地域情報や地元文化を発信するために、賑わいのある「道の駅」にするために

は、市民一人一人が「道の駅」を使ってどう地域の魅力を発信するのか、多くの市民の知恵や協力が欠かせません。高野地域をはじめ庄原市のポテンシャルは高いと思います。庄原市の総合力を結集し、「市民の誇り」となる「道の駅」を作り上げていきましょう。

プロフィール  
1953年長崎県佐世保市生まれ。大学卒業後、長崎の百貨店に入社。在籍20年の間、食料品の立ち上げを行い、マーケティング会社などを経て独立。直売所甲子園2011グランプリに輝いた「道の駅たちばな」や「九州のムラ市場」をはじめ、直売所の企画・プロデュース、特産品開発などを手がける。